

THE MOON ART CONTEST VOL.15

月のアート展

受賞作品
ご紹介

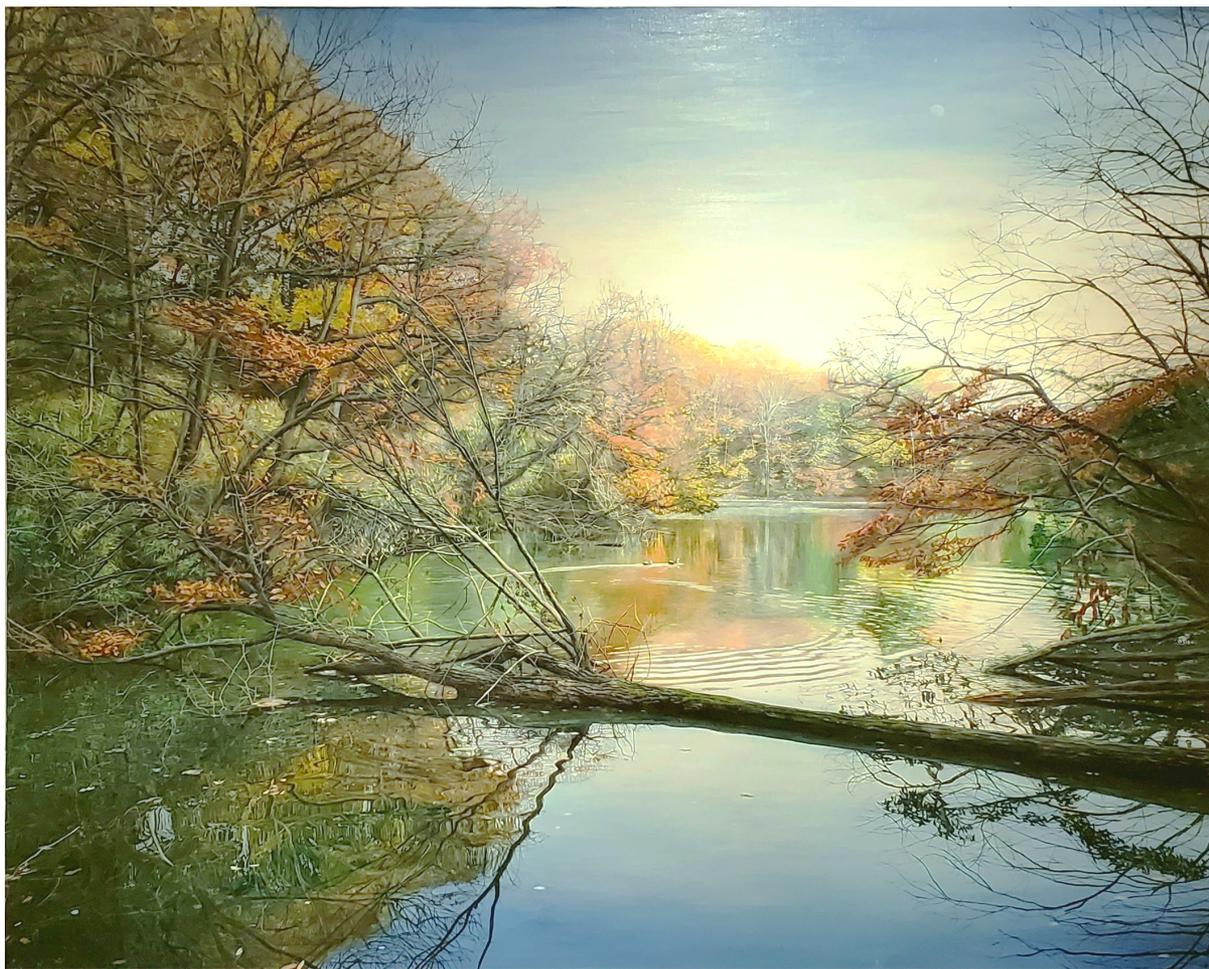
会期：2020年9月19日～10月11日

けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審査員：京都芸術大学 総合造形コース教授 柴田純生 先生

京都芸術大学 油画コース教授 奥田輝芳 先生

審査員 最優秀賞



『水景の月』中西 優多朗

<審査評>

この100号の大作は、けいはんな公園で催される「月のアート展」に相応しいと誰もが口をそろえるでしょう。

「自然そして生命というものが、生と死の繰り返し、、、云々」とコメントにはありませんが、そんなことより、中西さんがその場所で見つけたものを美しく表現しようとしたことが大事なことです。この作品の美しい表現とは、100号という大きいキャンバスに向かい、惜しみなく時間と絵具を注ぎ込み、作品として仕上げたことにあります。これからのさらなる努力を期待し、その成果を楽しみにしています。

審査員：奥田

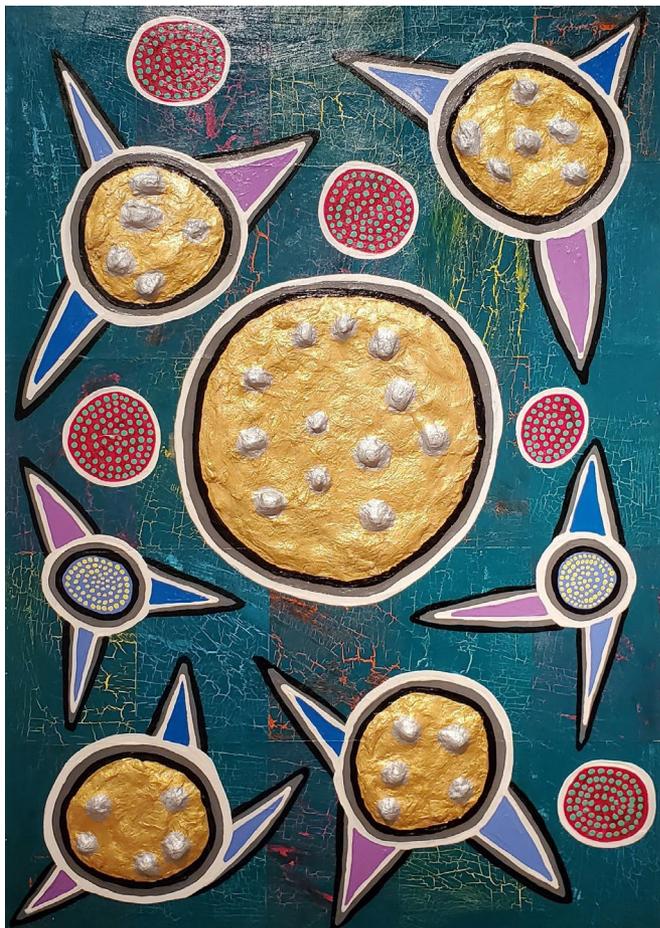


『さびの満月』
西平 愛

< 審査評 >

作者の言葉から、金色に輝く「鹿苑寺」がカシューと金顔料で描かれていることがわかります。所謂、漆に金泥、とは少しニュアンスが違うのでしょうか。金色によって引かれた線は、その素朴さゆえに屈託の無さ、拙なる美が宿っているようです。また、それ以上にカシュー（人口漆でしょうか）の質感に、作者は魅了されているようで微妙に揺れる表面の光沢や、金色をその表面に吸い込んだ吐き出したりするその様子は、見るものを画面に引き込みます。あと、構図を下準備の段階でもう一段、工夫してみてはいかがでしょうか。次作も期待します。

審査員：奥田



『満月があちこちへ飛んでく』
カミジョウ ミカ

< 審査評 >

これまでの美術史の流れとは一脱した独自の作品です。それでもって強いインパクトを与えています。この強いインパクトとは造形表現の上できわめて重要なアイテムです。一見して表現対象が不明ですが、不思議と引きつけられます。作品は太陽系の星々をモチーフにティッシュペーパー、古い葉書などを素材に用い、奔放に大胆にそれでいて丁寧に構成されています。画面の色彩もまた自由でのびのびとしています。本人によると友人の詩をもとに得たインスピレーションと自身のテーマである夢想への取り組みから生まれたものであり、それ故に独自の感性としての表現がきわだっています。これからの展開が楽しみです。

審査員：柴田



『月は見てた』（映像作品）
横江 風香

< 審査評 >

15回目を迎える月のアート展ですが絵画、工芸の出品が多数を示したこれまでにに対し、近年は写真やCG、ビデオの作品も見られます。新しい技法、技術の登場は表現の多様性ととも、作品鑑賞の楽しみを与えてくれます。このアニメーション作品も同様です。秋の星座をあらわす単純化された羊や馬のイラストが場面ごとに登場し、台詞とともにコミカルでユーモラスな動きを示しています。またあまり意味があるとは思えない言葉遊びの歌詞も、穏やかなBGMと相まって居心地のよい時間と空間を構成しています。自ずと作品の前に佇むことを自然に受け入れさせてくれます。
審査員：柴田



『鹿曼荼羅と螺旋型の形』
竹内 洋次

< 審査評 >

彫刻と見ることも可能でしょうが、むしろ立体造形と見るべきでしょう。ものすごくパワーを感じさせる作品です。雲の上に乗る鹿の木像はあくまで彫刻であり、背面を飾るLEDライトに照らされた鹿の図は絵画です。それを囲う鳥居は象徴的であり、現実と非現実の境界の役割を果たしているとも思えます。それを支える螺旋の台座も全体構造の中で効果的です。しかしその上で鹿、鳥居など登場物の完成度をとりますが、そうなるこの作品の愛らしさを損なうのかもしれませんが、むしろこの特徴を優先すべきでしょうか。様々な要因が見る人をいかようにも楽しませてくれる作品です。

審査員：柴田